

書の教育活動に関する指導法の研究

——書道ワークショップ2011の実践を通して——

森 哲 之*

A Study of Teaching Method on Calligraphy Education:
Through the Practice in 2011 Calligraphy Workshop

Tetsushi MORI*

はじめに

広島文教女子大学の教育活動を通じた地域貢献への取り組み「ソシオ活動」が5年目となる。その一環として、初等教育学科書写書道専修は、地域の子どもとその保護者を対象とした「書道ワークショップ」を継続し実施している。本年度は、初等教育学科の書写書道、図画工作の各専門領域において、リレー方式による本学公開講座が計画され、書写書道関係では、子どもの書道教室の中で「書道ワークショップ2011」を開催した。

書道ワークショップは、地域の子どもやその保護者を対象に、初等教育学科の特色ある教育活動を生かし、書の芸術文化のよさ、面白さ、楽しさ等に触れながら、表現活動や学習活動等を行うことを趣旨としている。この企画運営については、本学科の教育活動に位置づけ、学生は制作や研究を深めながら、地域の方との交流を模索している。また、書写書道専修の教育研究活動を軸に、研究課題等について問題解決を行っている。

学科の専門教育科目である教科教育学演習の中では、小学校国語科書写の学習指導、書の文

化や芸術に関する表現、総合的な学習等について検討している。そして、地域の方を対象に書の制作環境を設定し、多種多様な書写書道の活動に触れてもらい、書写書道教育のあり方を探求するものである。

本稿では、初等教育に関する書写書道の教育活動、書道ワークショップの実践内容について述べる。特に、文字を書く姿勢と筆記具の持ち方の指導支援、左利きの子どもへの支援と配慮について考察する。

次に、書道ワークショップの実践内容について触れていく（「資料：書道ワークショップ2011」参照）。

1. 書道ワークショップの実践

(1) 書道ワークショップ2011の概要

5回目となる「書道ワークショップ2011」は、本学公開講座「親子で参加！子どもの書道教室・図工教室」の中で展開した。2011年11月26日（土）（10：00～12：30）、広島文教女子大学1号館美術棟・125書道室において開催し、子ども33名、保護者20名、計53名が参加した。

書道ワークショップのテーマについては、学生からのアイデアを集約し、それぞれの研究課題について、実践を通して検証している。基本的には、書写書道専修の特色ある教育活動を生

* 本学准教授

かし、学校現場を想定した企画とした。参加者が主体的に制作できるよう、書写、漢字の成り立ち、手紙、大筆書き、大きな旗の共同制作等の各種コーナーを設定した。開催に関する募集は、新聞各社への折り込みちらし「公開講座案内」と本学ホームページへの掲載等による。

次に、本ワークショップの事前準備、全体の流れ、当日の内容等について述べていく。

(2) 書写書道の活動における企画と環境

地域の方と大学との交流拠点として、本学のギャラリーや専門教室を活用した。会場となる専門の書道室に関しては、参加者が書の制作を自由に取り組むことができるよう環境整備を行った。机上、教室後方に制作場所を設け、いずれも大型の毛氈を敷き詰めている。教室の周囲や机上には、参考作品を展示し、参加者の制作への一助とした。各コーナーには、各種毛筆、墨、顔彩、硯、半紙、和紙、画仙紙等の書画の用具用材を配した。また、黑板には、板書計画の上、ワークショップの内容を分かりやすく板書し概要を紹介した。

美術棟ギャラリーは、作品鑑賞ができるように、学生と教員の作品等を展示し、芸術や書の世界への入り口とした。また、参加者には、受付の際、色紙や色和紙、はがき等をセットしたファイル一式を手渡し、各コーナーで活用できるようにした。子どもには、手作りの名札を用意し、名前を書いてもらい、着衣に付けてもらった。

(3) オープニング・デモンストレーション

オープニングでは、本ワークショップの趣旨説明、実演を交えた各コーナーの説明(図3)、書道パフォーマンス(図4)、デモンストレーションを行った。その後、参加者は興味関心の

あるコーナーを巡回することになる。

オープニングの中では、書写の基本事項の確認として、特に、文字を書く姿勢や筆記具の持ち方について、子ども達に楽しく理解してもらえるよう配慮した。

筆記具の持ち方については、パネルシアター(図2)を活用した。毛筆小筆を2本ずつ手渡し、まずは、箸の持ち方におけるその上部の箸の状態を目安とさせた。別の観点からは、親指と人差し指の先を意識し挟んでみることで、そこに中指の先を添えるよう促した。指の位置関係や方法を示しながら自然な握りや持ち方について確認した。詳細については、後の章で述べる。

次に、書写のための準備運動や動機付けとして、また、学生と子ども達が楽しく触れ合い活動するきっかけとなるよう、スポーツにおける準備体操を参考に、指や手、身体を動かす書写体操(図6)を試みた。子どもがよく知る曲に合わせて、各自筆を手を持ち、書写における基本点画の筆運びをイメージしたウォーミングアップとした。全身での運筆の運動は、書写指導における空書きによる学習と重なる(図7)。

文字を書く姿勢については、図解とともに、実際に学生が筆記具を持ち、文字を書く体勢を客観的に見てもらうことにより示した。背筋、足、手の状態のポイントを、対話を持ちながら伝えていった。

(4) 各コーナーの特徴

〔書写コーナー〕

小学校の書写学習を基本に展開するコーナーとした。事前に、子どもが楽しめるよう、絵画やキャラクター等に隠し文字や基本点画の輪郭を盛り込み、筆で上からなぞりながら学習できるワークシートの開発を行った。

子ども、大人の方にも楽しみながら学んでもらえた。各種ワークシートは効果的であり、子どもたちが進んで取り組む姿が見られた。そして、子どもが課題とする点画の書き方に応じて、一緒に書くなどの支援を行い、対話を持ち解決していくようにした（図9）。

また、参考作品を活用し、好きな文字や言葉、名前を和紙に書くなど、子どもが主体的に取り組むことができる書写学習とした（図8）。

〔漢字の成り立ちコーナー〕

漢字への興味関心を高め、併せて書写の学習と関連させる教材開発を検討した。そこで、漢字の成り立ちを絵文字で表現した教材、書写としての捉え方を見て書いて学べる教材を作成した。また、透明ファイルに籠字を分かりやすく書いた教材も加え、敷き写して書き試すことができ、書いたものに重ねれば自ずと課題点に気付かせることができるものとした（図10）。

また別に、文字の成り立ちをクイズ形式にしたパネルを用意し、同時に書写学習の参考となる教材とした。

〔手紙コーナー〕

手紙のコーナーでは、親子で毛筆を用いて心の込めた手紙が書けるようにした。固型墨を磨って書くことができるようにし、また、顔彩を用意し色彩豊かに取り組むこともできるようにした。制作の契機や参考となるよう学生による絵手紙など多様な作品を例示しておいた。

感謝の気持ちをテーマとし、子どもからお家の人へ贈る手紙を提案した。また、親子でのやりとりを楽しむことを想定し、相手のことを思いながら心を込めて書いてみることを促した。手書きの書は温かみがあり、その人らしさがにじみ出て、気持ちが伝わるものであろう。

子どもたちは家族に感謝の手紙を書いていた。子どもと一緒に保護者も取り組む姿も見られた。

手書きの書を活用したコミュニケーションと豊かな心の育成に繋がるものとなった（図11）。

〔昔の文字コーナー〕

昔の文字コーナーでは、学生が制作等で取り組み深めてきた書の古典等から、様々な書体のユニークな文字を紹介し、毛筆で挑戦するものとした。デザインとして面白い文字、装飾的な文字等に触れることにより、豊かな書の表現に目を向けさせた。

〔大筆書きのコーナー〕

大筆に親しみ、体全体を使って書く楽しさを体感することをねらいとした。160×100 cmの画仙紙に、大筆で一文字を書く。大筆の寸法は、筆毛23、径6、毛先幅20、全長63 cm程である。子どもの身体より大きな文字を、全身で書くことを通して生き生きとした書を実感させた。

オープニング時の説明では、学生、教員による大きな書のデモンストレーション（図5）を行った。全身で書く姿を披露した。学生による筆仙人の仮装は、子どもたちに好評であった。布で作った衣装を身に纏い筆仙人に扮した学生が、大きな紙から登場した。伸びやかに、勢いを持ち、全身で大胆に表現した。

実際の制作場面では、構想を練り半紙に下書きの後、子どもも大人も勢いよく大筆を揮っていた（図12、13、14）。親子一緒に筆を持ち書く姿も見られた。大筆で書くことを通して家族間のコミュニケーションもできたようである。

（5）共同制作・エンディング

〔共同制作：大きな旗づくり〕

共同制作では、大きな旗（143×240 cm）に、「ありがとう」をテーマとして参加者全員で思いに寄せ書きし、一つの作品を協同して制作した（図15、16）。大きな用紙に柄を付け旗とし、事前に用意しておいた。各コーナーでの表現方

法を生かしながら、様々な文字やことばを自由に表現した。各々書き進めつつ、他者の書いたものを受けて工夫を凝らす様子も見られた。ここでも、それぞれの個性が見られ、子ども同士の関わり合いによる表現の相乗効果があった。

〔エンディング〕

エンディングにおいては、できあがった共同制作の旗の紹介を行った。また、ワークショップの振り返りをしながら、子どもたちに感想を発表してもらった。楽しかったことなどを子どもたちは答えてくれた。最後に、気に入った自身の作品を持ち寄り、記念撮影を行った(図1)。

(6) 参加者の意見等

参加者アンケートから意見や感想が寄せられた。以下に主なものを抜粋する。

- ・筆で書くことに親しみをもてたことと思う。
- ・書道が楽しいものだとなりました。子どもの頃から辛く難しいというイメージを持っていました。
- ・子どもが興味をもてるように演出していただけでした。
- ・学生さんの始めの説明が子どもたちにわかりやすくよかったです。
- ・デモンストレーションもテンポよく、子どもたちが飽きないようによく工夫されていると思いました。
- ・漢字の成り立ちコーナーはよく考えてあるなと思った。長女はいつも漢字を書かないけど、興味を持って何点か書いていた。
- ・書写コーナーではキャラクターなどに線や点を入れてあり子どもが楽しみながら練習できると思いました。
- ・書写でのプリント。とめ、はねなどをケーキや、クリスマスツリーにみたててわかりやすく、楽しく筆の練習ができて工夫され

てよかった。

- ・はじめははずかしそうにしていたましたが、絵手紙や、大筆で筆を使って何かにチャレンジする、できる自信ができてきたように思います。楽しそうでした。
- ・大筆が体験できてうれしかったです。テレビでしか見たことなかった。
- ・大筆コーナー。普段触れることがないのでとても良い体験ができました。迫力がある。
- ・普段できないことが出来てのびのびとやっていた。
- ・初めての書道体験。家ではなかなかできないようなことなので貴重な時間でした。
- ・学生さんたちが一生懸命やってくださったのでとても良い印象でした。楽しかったです。
- ・親切でいろいろな企画、コーナーがあり楽しかったです。
- ・気配りが効いていて対応も良く、楽しく参加できました。
- ・とても優しく楽しい企画を作って下さってありがとうございました。
- ・とても楽しくて、子どもたちを温かく見守っていただき感謝しています。
- ・地域に根ざしたとても楽しい講座、ありがとうございました。

(7) 書道ワークショップの成果と課題

「書道ワークショップ2011」では、地域の親子に、初等教育学科の書教育研究に基づく企画を通じて、多様な書の芸術や文化に触れてもらうことができた。

学生にとって、事前の計画から事後のまとめまで一連の企画運営とともに、地域の親子と触れ合う機会は、貴重な経験となり、大きな収穫があったようである。また、学生それぞれの研

究課題について、ワークショップによる実践を通して、幼稚園や小学校の現場等での指導に応用していくための検証が行えた。学生一人一人にとって、将来を見据えた活動となるものであった。

2. 書写書道の教育活動における支援の観点

(1) 筆記具の持ち方に関する問題点

筆記具の持ち方については、小学校国語科書写において指導がなされるが、すでに幼児期には日常に筆記具を使用し絵や文字を書いている状況がある。保護者は箸の持ち方については躰として取り扱うが、子どもの筆記具の持ち方について詳しく意識するケースは箸の持ち方ほどにはないようである。したがって、硬筆書写を学習しはじめる小学校低学年段階においては、その持ち方が様々な形である程度定着しつつある。また、絵筆など毛筆に近い用具を使用することもあるが、いわゆる握み握りが見られる場合もある。

小学校低学年の書写の授業における持ち方指導は、学年はじめに伝えた後に、細かな個別指導が及びにくいことがあり、教師の意識により持ち方の定着に差が出てくる。さらに、小学校入学前にある程度書けるであろうことが前提となり、見過ごされる場合もある。また、学年が上がるにつれ、持ち方は理解していることが前提とされ、指導が薄らいでいくことも考えられる。

かたや大学生において、ある程度正しく丁寧に文字が書ける学生であっても、持ち方には多様な実態がある。姿勢が前傾で、強く握り過ぎる傾向が見受けられる。

(2) 文字を書く姿勢における課題

文字を書くことは、国語科書写の授業に限らず、多くの学習や日常生活に関わる。特に、書く姿勢については、教師や学習者が意識をしていないと崩れやすいところがある。

例えば、小学校における毎回の授業の始まりに「姿勢を正しましょう」や、「立腰教育」における「腰骨を立てましょう」などとする声掛けによる実践がある。日常の書写に生かしていくことをどれくらい教師が考え、児童に身につけさせようとするか、その意識や働きかけによって、児童が望ましい姿勢を保つのに大きな差が生じる。始業の挨拶時の決まり文句に止まる場合もある。

しかしながら、身体が捻ったままに持続している状態、前屈みで背中が曲がり、目元が頭部で陰になり、手元に目が近い状態などは、目や背骨をはじめとする身体の健康という観点からも、決して望ましいものではないであろう。子どもの身体の成長を考えてみても、長時間そのような体勢にあることは不自然なことであり、弊害が懸念される。姿勢を正すことのメリット、曲がったままの状態のデメリットについて理解しておくことが肝要であろう。

ピアノ等の楽器の演奏やスポーツ等における背筋を伸ばす姿勢の経験と照らし合わせると実感を持たせやすい。

(3) 筆記具の持ち方に関する支援

今回のワークショップにおける筆記具、主に毛筆の持ち方に関する指導、支援については、幼児から小学校低学年の児童が分かりやすいように工夫、検討した。幼児教育を学ぶ学生のアイデアを生かし、手法において、パネルシアターを活用した。ストーリーを作り、歌や声掛けとともに、楽しく、一つ一つの動作を理解し

やすく示した。絵に書いた動物が入れ替わり登場し説明するところにも、興味関心を抱かせ、楽しい活動として持ち方を捉えてもらう意図を持たせた。

筆記具の穂先を手前に置いた時に、親指と人差し指の指先で筆記具を掴む感覚が重視されることが大事である。その状態から、筆記具の頭部を持ち上げていくが、その観点から、パッコンと指先で掴み、ヒュッと持ち上げる掛け声で、楽しく分かりやすくポイントを示した。そして、二本の指先の意識を高めさせることに集中させた。最後に、筆管上部を垂直に近く起こしつつ、手前に傾けていく時に、中指の先をそっと添えていく。筆管が人差し指に沿った位置が目安となる。

子どもが箸の持ち方を身につけることについても、時間と労力が掛かるように、筆記具の持ち方についても、一度伝えただけでは、そう簡単にできることではないのである。継続した指導支援のあり方が望まれ、今回検討した手法などを繰り返すことにより、楽しみながら筆記具の持ち方を身につけさせられよう。

また、一方、箸の持ち方における上部の箸の扱いや動きは、繊細かつ強弱の変化をもたらすことができる。使用に際して効率がよく、理に適っており、負荷が掛からない持ち方と言えよう。したがって、筆記具における持ち方と照らし合わせて、上部の箸の持ち方に準じた持ち方を伝えることが分かりやすく、実感しやすい方法と言える。また、毛筆と硬筆の持ち方には共通項が見出され、この点については両者ともに通ずることであろう。

(4) 筆記具を握る力の加減と筆圧

筆記具を握る力について、特に鉛筆等でしっかりした文字を書かせる意図から、強く濃く書

くことを求めることがしばしばある。しかしながら、そのことだけが先行してしまうと、強く握り過ぎ、小さな子どもにとっては手や指への大きな負担となることが考えられる。そこで、子どもの手の成長や発達を考慮することも重要であろう。そのためには、多くの文字等を長時間、負担なく書くことができる配慮をしたい。

硬筆使用において、硬い芯の鉛筆の場合、濃さは比較的薄くなるであろう。同じ筆圧でも、濃く書くことのできる柔らかい芯の鉛筆の使用で十分に濃さの対応ができる。負荷を掛け過ぎない適度な筆圧と、筆記具の選択を優先的に考えたい。

(5) 毛筆書写から学ぶ硬筆書写の観点

正しく丁寧な文字が書かれている場合に、書写された文字の結果が第一に判断され、実際に書いている状態や状況の問題点が見過ごされることがある。

毛筆における自然な筆圧の加減や運筆は、硬筆使用においても理に適う方法である。毛筆においては、強く握り押さえつけることは決してしないであろう。

筆圧の加減は、硬筆においても、筆管を垂直に近く起こせば、力の加わり方は指への負担とならず、鉛筆等の先端に伝わりやすくなる。硬筆と紙面との角度が大きければ筆圧は強くなり、硬筆と紙面との角度が小さければ筆圧は弱くなる。その筆圧が弱くなっている状態において、指の力で筆圧のみを強めようとする時に、筆記具にではなく、人差し指に負荷が掛かり反る要因や強く握りすぎる要因となる。あるいは、親指が巻き込んでいくのである。

硬筆の持ち方についての意識において、大事にしたいことは、毛筆使用における筆圧の加減やその先端への力の集中のさせ方にある。した

がって、毛筆同様に、筆管を多少起こすことによって指への負荷を避け、筆圧を加減する感覚を優先させたい。

観点としては、子どもが多く文字を長い時間書くことを前提に、手や指に無理なく余分な負荷を掛けることがない配慮がここでも重要と言えよう。

3. 左利きの子どもへの配慮と支援

(1) 左利きの子どもの書写の困難さ

今回、左利きの子どもが書写することを想定し、どのようなことが必要かを検討した。そして、左利きの学生を目線からも、その経験や利き手に関する調査等を元に、書写書道の活動における左利きの子どもに対する配慮や支援のあり方を考え試行した。

左利きの立場からは、日常生活において不便なこと、不自由なことが様々にある。家電・機器類の操作、はさみ、改札、その他多くのものは、基本的に右利き仕様にデザインされている。

書写や書道の文房具に目を向けてみると、当然と思われているところに、左利きにとっての使いづらさが浮かび上がる。書道の文化的背景からは、硯や毛筆、墨等の文房具類は右側へ置くが、左利きの書写では、その位置であると用具が扱いづらく、手本、資料等が見えづらく、書きづらいのである。そのような場合に、学校現場においては、その実感等があまり共有されておらず、配慮されることも少ないのが実情のようだ。あるいは、文化的観念が優先されると、文房具の右置きを闇雲に強いてしまう可能性がある。書写の目的に沿った柔軟な対応が必要となろう。以上のことは、毛筆書写に限らず、硬筆書写の場合にも同様のことが言える。

このように、左利きの子どもにとっては、書写において不便に感じられることが多々あり、

子どもの発達段階に応じた柔軟な対応を必要とする。状況によっては、用具類を左側に置いた方が書写活動には適することが考えられ、そのような配慮を要する。

(2) 左利き児童の筆記具の持ち方への支援

左利きの子どもの筆記具の持ち方について、十分な対応が取られていないことがあるようである。左利き用に、写真や図等で持ち方が示されているものがそもそも少なく、特に幼児や小学校低学年の児童にとっては、右利き用の例示から理解していくことに難しさを感じている状況がある。その段階で躓きが生じたり、自身で思い込んだ持ち方、書きづらさに対応した特殊な持ち方に変化したりし、延いては、姿勢の傾きなどにも影響を及ぼすことが考えられる。そのため、左利き用のための持ち方の図示等も後に試行した。

このことは、決して左利きの課題のみのことではない。右利きの子どものでも理解の差や教師の指導支援の温度差によって同様の状況が考えられる。より丁寧な配慮や日常における継続的な支援が望まれる。

一方、左利きの子どもの保護者の意識についてであるが、右手で書けるようにさせたいと思う保護者の中にはいる。基本的には、子どもの自然な持ち方の状態や本人の意志を尊重することが望ましいであろう。左利きの子ども自らが、経験等から右手で書くことを望むならば、このことも尊重したい。

また、書写学習の視点から、毛筆書写と硬筆書写との関連を考えると、毛筆書写は、硬筆書写能力の基礎を養うことから、硬筆が左利きの場合、毛筆書写も左手で書くことが自然な流れで、子どもにとって実感しやすいものと考えられる。

おわりに

姿勢や筆記具の持ち方について、その支援のあり方を様々な観点から検討した。

幼児期には、筆記具の持ち方について指導や支援する体制が少なく、手や指に負担の掛かる持ち方をする子どもの状況が見受けられる。筆記具の持ち方の指導は、小学校低学年国語科書写において取り扱われるが、それ以前の段階ですでに筆記具を使用していることから、幼児期における持ち方の支援はある程度必要なことと言える。ワークショップでの実践のように、幼児期においては、指導して正すというより、繰り返し楽しみながら身につけさせていく支援方法が適するであろう。現に箸の持ち方を生活の中で身につけようとしている状況もあり、関連づけることにより、筆記具の持ち方を自然な形で覚えさせることができると考える。また、小学校低学年の児童においては、改めて丁寧な

指導とともに、継続した支援が望まれ、正しい姿勢との関連づけが重要な視点となる。

一方、左利きの子どもへの指導支援や配慮についての必要性が浮かび上がった。書写教育におけるユニバーサルデザインの観点とも言えよう。一昨年は、障害のある方も参加されていたが、子どもから大人まで誰もが、書を通して楽しみながら学ぶというコンセプトで、コミュニケーションを大事にした取り組みに、支障なく参加いただけた経緯もある。これらの見方や考え方は、もちろん右利きで書写に苦手意識を持つ子どもなどに対して、同様の配慮や支援の観点が生かされるであろう。書写活動等における継続した個別支援の観点が必要とされる。

参考文献

全国大学書写書道教育学会編『明解 書写教育』萱原書房（2009）

資料：書道ワークショップ2011



図1 書道ワークショップ参加者及び制作作品



図5 筆者による大作デモンストレーション



図2 パネルシアター「筆の持ち方」実演



図6 筆の持ち方支援「書写体操」i



図3 書写コーナー・デモンストレーション「永」字



図7 筆の持ち方支援「書写体操」ii



図4 大筆書きコーナー・デモンストレーション



図8 書写コーナー参考作品及び制作



図9 書写コーナー指導支援



図13 子どもによる大筆書き制作 ii



図10 漢字の成り立ちコーナー教材及び制作



図14 子どもによる大筆書き制作 iii



図11 絵手紙コーナー制作



図15 「大きな旗」共同制作 i



図12 子どもによる大筆書き制作 i



図16 「大きな旗」共同制作 ii